

不当支配 (下)

―会議での挙手は、なぜ禁じられるのか―

ジャーナリスト

榎田 秀樹

●かしだ・ひでき 1959年北海道生まれ。ソマリアの難民キャンプや、ボルネオ島熱帯林の先住民に関わる活動を経験。国内外の社会問題、環境問題や人物ルポを手がける。著書に『9つの森の教え』（筆名・峠隆一）、『新しい貯金』など。『世界』『週刊金曜日』でも活躍している。

元高校校長・土肥^{どひのぶお}信雄の非常勤教員採用試験不合格を争う裁判（二審）は土肥側が敗訴した。ウソをつく側が勝ち正直者が負ける――判決にはそんな印象を受ける。教員にとつての言論の自由を問う、土肥や教え子ら支援者の闘いは第二ラウンドへ向かう。

二〇〇九年四月一日、土肥は無職となったが、心は「裁判」へと向いていた。その第一歩となるのが、四月五日の「10年ぶりの土肥授業」。主催したのは、教え子である小川高校十五期生（一九九六年卒業）の河辺康太郎だ。

河辺は悩んでいた。「若者の夢を実現できる社会を」との熱き思いで、東京都町田市の市議会議員（民主党）

よく知らない人間もいます。僕はまず、先生がどう闘ってきたかを伝えたいと思っています」

「ありがたい話だよ、河辺。そういう場を持つてくれるのは本当に嬉しいよ」

すぐに河辺は、同じ十五期の高本直司など数人と話し合い、決めたのが「10年ぶりの土肥授業」だった。十五期生たちが集まってもらつての土肥の講演会だ。「僕にすれば、僕たちの社会科教師が社会の教材になつてしまつたわけです（笑）」（河辺）

教え子と保護者が支援

町田市市民ホールで行なわれた「10年ぶりの土肥授業」には約六十人が集まつた。十五期生に加え、矢島薫（三月号参照）など二期生も土肥から直接誘われて参加した。土肥は一時時間をかけ、都教委との闘いのすべてを話した。土肥の言葉は、マスコミ報道よりも重く心に響いた――「一人で闘つていたんだ……」

ここで、土肥を支えようと決めた教え子は多い。たとえばいま、矢島は「私を見放さなかつた先生ですから」と、裁判をほとんど傍聴し、集会のスタッフとし

に〇六年に初当選したが、市と市議会との力関係、会派間の力関係に挟まれ、新人では理想の政治活動が実現できないことがしんどかつたのだ。

一月、ある新聞記事に「あつ！」と驚いた。都教委と闘う土肥の非常勤採用試験不合格の記事だった。

「互いの置かれた立場が、心情的に重なる部分があると思ひました。記事は、僕に『力を尽くせ』と訴えているような気がしたんです」

同時に「先生のため何かしなければ」と思つた河辺は、すぐに三鷹高校に電話をかけた。

「おー、河辺か。元気か！」

相変わらず快活な土肥の声に河辺は伝えた。

「都教委とのことですが、僕らの周りには、この件を

て積極的に関わつている。

一方、在職中は生徒や保護者を巻き込まなかつた土肥だが、退職後は、力になつてくれそうな保護者とやりとりを交わしていた。

その中に、娘が〇六年に三鷹高校に入学した羽賀しげ子・平田研二夫妻がいる。羽賀は、土肥の在職中からその闘いを気にかけていたが、土肥が一切話さなかつたこともあり、校長室に行つて「先生、応援していただきます」と土肥に声をかけるのがせいぜいだった。

だが〇九年三月、娘と同時に三鷹高校を去る土肥のため、色紙のプレゼントを思いつく。そして卒業式当日、保護者たちにメッセージを書いてもらい、土肥に手渡したのだ。そんなことがあつたので、土肥から力になつてくれないかとの声がかかつたとき、羽賀と平田に断る理由はなかつた。平田はこう語る。

「やはり、娘が三年間ノビノビ好きなことをやれたのが大きかつた。それは、土肥校長が作つた校風なんだ。だから感謝している」

羽賀はこう続けた。

「それを壊そうとする都教委のやり方は腹に据えかねるものがあります」